

## 會 務

土木學會誌 第十二卷第三號 大正十五年六月

- 大正十五年三月二十三日編輯委員會を開き川口委員長黒田、佐藤、野口、谷井の各委員三浦囑託出席會誌編輯上に付協議を爲せり
- 同年四月八日(木曜日)午後四時十五分より東京市麴町區有樂町一丁目一番地帝國鐵道協會に於て第四十二回講演會を開催し下記の講演ありたり當日は市瀬副會長外役員、會員及會員外の者とも併せて百十餘名の來聽者ありたり尙閉會後同所に於て晚餐會を開き四十五名の出席者あり盛會裡に同七時半散會せり  
     △獨逸の河川に就て           會員工學士内務技師 辰馬録藏君
- 同年四月二十日編輯委員會を開き川口委員長佐藤、野口、谷井、山崎の各委員三浦囑託出席會誌編輯上に付協議を爲せり
- 同年同月二十四日役員會を開き市瀬、那波の兩副會長大河戸、島、眞島、物部の各常議員日下部、中山の兩前會長井上、丹治の兩主事出席市瀬副會長議長席に著き下記事項を決議せり  
     △國産振興會々長男爵阪谷芳郎氏より同會趣旨を賛同し參加せられたき旨照會ありたるに對し本會は之に参加することゝし會長及副會長を本會代表者として通知すること  
     其他會務に關する事項
- 同年四月十六日會誌第十二卷第一號發行成規の届出を爲し同十七日各會員に配付せり
- 准員三木巳代吉君は「榮三」と改名せられたる旨届出ありたり
- 下記の諸氏は退會せられたり

### 會 員

川 江 秀 雄 君

### 准 員

淺 田 平 太 郎 君    岩 橋 茂 藏 君    木 内 富 太 郎 君

坂 本 明 榮 君    島 田 義 章 君    田 添 忠 太 郎 君

寺 田 竹 治 君    沼 田 秀 雄 君    山 口 稔 君

### 學 生 員

原 本 和 佐 君

- 同年三月十六日以降五月十五日迄に入會を承認し名簿に登録したるもの下記の如し

(○印は准員より▲印は學生員より轉じたるものを示す)

### 會 員 (三十九名)

- 足 立 元 二 郎 君    ○赤 松 三 郎 君    ○伊 川 重 良 君

- |              |              |              |
|--------------|--------------|--------------|
| ○岩 間 正 臣 君   | ○植 村 倉 藏 君   | ○大 島 六 七 男 君 |
| ○荻 原 基 治 君   | ○草 野 源 八 郎 君 | ○小 池 啓 吉 君   |
| ○後 藤 登 君     | ○齋 藤 靜 雄 君   | ○重 富 潔 君     |
| ○白 川 周 一 君   | ○白 木 原 民 次 君 | ○進 來 要 君     |
| ○千 田 正 重 君   | ○田 中 貞 次 君   | ○田 中 傳 吾 君   |
| ○武 居 軍 次 郎 君 | ○竹 内 常 八 君   | ○長 郷 衛 二 君   |
| ○張 惟 和 君     | ○坪 井 豐 彦 君   | ○中 原 達 弘 君   |
| ○中 島 洋 吉 君   | ○西 義 一 君     | ○馬 場 彰 君     |
| ○林 將 治 君     | ○平 井 力 君     | ○福 留 正 鹿 君   |
| ○深 尾 代 治 君   | ○松 谷 正 君     | ○牧 野 潔 君     |
| ○待 山 義 雄 君   | ○望 月 專 一 君   | ○山 下 繁 造 君   |
| ○山 口 圭 助 君   | ○山 田 元 君     | ○和 田 正 一 君   |

准 員 (九名)

- |            |             |             |
|------------|-------------|-------------|
| △池 田 三 七 君 | 菊 地 千 代 三 君 | 小 松 喬 君     |
| 佐々木 徳 太 君  | 尋 木 規 一 君   | 丹 内 爲 吉 君   |
| 西 山 弘 資 君  | 引 野 通 夫 君   | 細 井 吉 次 郎 君 |

學 生 員 (十七名)

- |             |             |             |
|-------------|-------------|-------------|
| 栗 田 捷 夫 君   | 梅 澤 友 次 郎 君 | 岡 本 増 成 君   |
| 川 合 三 郎 君   | 黒 田 重 治 君   | 小 島 兼 文 君   |
| 小 會 根 七 郎 君 | 高 橋 忠 夫 君   | 照 井 隆 三 郎 君 |
| 洞 庭 謙 君     | 徳 田 寄 海 君   | 樋 浦 大 三 君   |
| 羽 賀 正 義 君   | 平 山 泰 治 君   | 松 浦 伊 三 郎 君 |
| 松 本 達 次 君   | 宮 本 九 郎 君   |             |

○同年三月十六日以降五月十五日までに寄贈及交換を受けたる雑誌其他下記三十三種なり  
寄贈を受けたる分

水道用鑄鐵直管及異形管類規格	一冊	上 水 協 議 會
工學部紀要 第三卷第十號及第四卷第一、二號	三冊	京 都 帝 國 大 學 工 學 部
日本工業要錄 第二卷第二、三、四號	三冊	工 業 要 錄 發 行 所
土木建築工事畫報 四、五、六月號	三冊	工 事 畫 報 社
水曜會誌 第五卷第一號	一冊	水 曜 會
工政 第七七、七八、七九號	三冊	工 政 會
大阪能率研究會誌 第一卷第一號	一冊	大 阪 能 率 研 究 會

本邦道路橋樞覽	一冊	內務省土木試驗所
名古屋工業會々報 第三六、三七、三八號	三冊	名古屋工業會
滿洲技術協會誌 第三卷第十二、十三號	二冊	滿洲技術協會
三菱電機 第二卷第四、五、六號	三冊	三菱電機株式會社神戶製作所
日立評論 第九卷第四號	一冊	日立評論社
港灣 第四卷第四、五、六號及會員名簿	四冊	港 港 協 會
京都帝國大學一覽	一冊	京 都 帝 國 大 學
帝國學士院紀事 第一、二、三、四號	四冊	帝 國 學 士 院
電氣製鋼 第二卷第四、五、六號	三冊	電 氣 製 鋼 研 究 會
財團法人啓明會第十七回講演集	一冊	財 團 法 人 啓 明 會
建設 第二卷第五、六號	二冊	建 設 社
第二回保線講話會記錄	一冊	鐵道省工務局保線課長
仙臺高等工業學校紀要 第四冊	一冊	仙 臺 高 等 工 業 學 校
電氣雜誌 第十二卷第二百九號—第三百一號	三冊	發 電 水 力 社
土木建築資料通信 第百二號 第百三號	二冊	土 木 建 築 資 料 通 信 社
日本之電氣事業及興電氣博覽會	二冊	日 本 電 氣 協 會 編 中 山 龍 次 郎 氏
The Excavating Engineer No. 4.	一冊	三 井 物 產 株 式 會 社 機 械 部
土木建築雜誌 第五卷第五號	一冊	シ ン ヂ ー ル 社
交換の分		
鐵と鋼 第十二年第三、四、五號	三冊	鐵 鋼 協 會
建築雜誌 第四〇輯第四八〇、四八一號	二冊	建 築 學 會
業務研究資料 第十四卷第三六號及 大正十、十一年度鐵道災害記事	五冊	鐵 道 省 大 臣 官 房 研 究 所
工業化學雜誌 第二十九編第四、五冊	二冊	社 團 法 人 工 業 化 學 會
機械學會誌第二十九卷第百八、百九號	二冊	機 會 學 會
電氣學會雜誌第四五三一四五五號	三冊	電 氣 學 會

會員太田圓三君は大正十五年三月二十一日同笠原壽治郎君同矢内信讓君准員工藤鶴吉君は同年五月廿二日同渡邊七郎君學生員西口品三郎君は同年(月日不詳)何れも死去せられたり本會は哀悼の意を表す

## 土木學會第十一回視察旅行記事

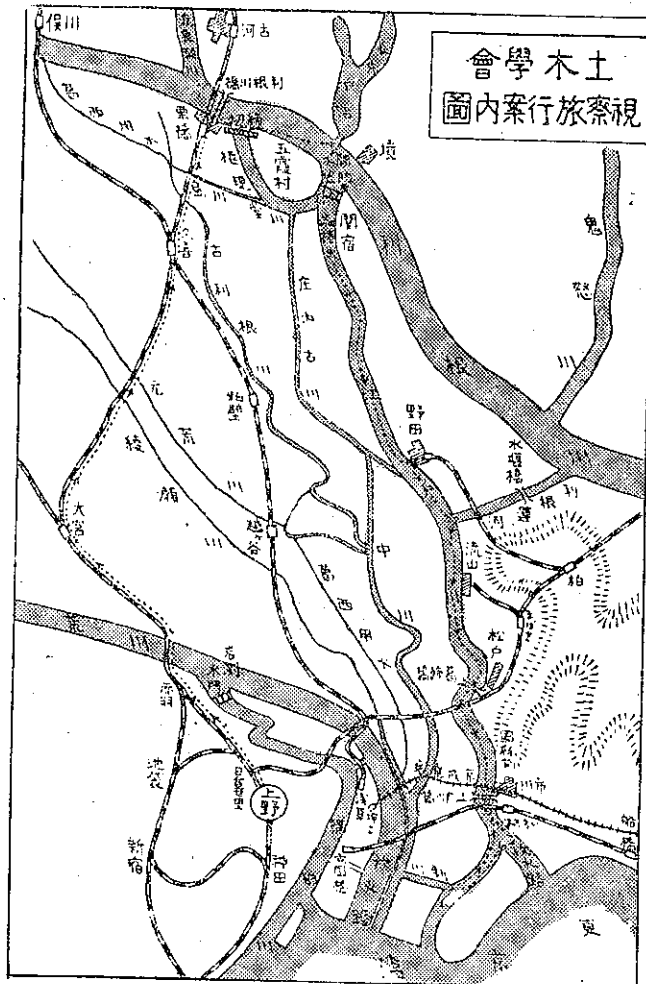
大正十五年五月十五、十六日（土曜、日曜）我土木學會の年中行事の一たる視察旅行として内務省施行の利根川及び江戸川改修工事其他の視察と決定したのである。

當日は晴雨に不拘決行するので雨は例年我が視察團には付きものゝ感があるから本部では當日の御天氣を気にしながら前夜のラヂオの天氣豫報で翌日晴天の由を知り聊か安心したのであつた、十五日は午前十一時四十分上野驛出發なので十時半には本部を事務所より上野驛構内に移した、天帝も此旅行の門出を祝福されてか頃日來の不順な陽氣も臯月晴に相應しい温かさになつたのである、出發時間が迫るにつれて参加會員は陸續と參集された。

會員は白薔薇職員は赤薔薇の團員章を各々左襟に附した團員は上野驛長の好意で發車前一般乗客に先だち二等の貸切車へ納り込んだのである車内では日頃多忙な人達とて車中に腰をおろして初めて旅の情緒が漂ふて居つた。

列車が動き出すと兵站部より行厨、ビール、サイダー、茶菓其他種々の御馳走を配られて甘辛兩黨思ひ思ひの談笑裡に舌鼓が初まつた田端王子とまたたくまに過ぎ荒川を渡る頃より窓外には武蔵野の新緑爽かに生氣ある廣野が展開され車内では各處に歡談湧き奇語起り其團樂の有様は實に一の歡樂境の感があつた。

浦和邊りで内務省東京土木出張所より寄贈された視察すべき各所の工事概要、或は各所の史蹟等を態々印刷に附して配付され車中の話題ともなし又兼而視察の



便を助けられたのである。

列車は定時(午後一時二十分)に栗橋に著いたので此處で下車して直ちに元老組は自動車で若手組は徒歩で利根川橋畔に赴いた本橋は橋長 1,727 呎 (200 呎 4 連, 100 呎 9 連) を架設し總事業費 926,000 餘圓で大正十年十一月の起工同十三年九月竣成したものである。

橋上で工事擔當者たりし内務技師青木楠男君より詳細なる説明を得た小憩後直ちに内務省より特に我一行のために用意されたる、桂、柏、芙蓉の 3 隻のランチに分乘して権現堂川締切工事、長井戸沿耕地整理排水設備、關宿閘門、同水堰及び放水工事並に捧出し(舊幕以來江戸川水量の制限設備)等を視察したのである視察には其都度上陸して懇切に詳細なる説明を得一行の裨益少なからざるものがあつた。

乗船中船内では歡待の設備至らざるなく約半日に渡る長時間も身に涼風を浴び目に風を孕んだ眞帆片帆を打ち眺めつゝ何等倦怠もなくすごしたのである午後五時野田町に上陸し野田町より特に一行のために差廻はされたる自動車により旅亭待月、門松、和泉の 3 樓に分宿して身を休めたのであつた當夜は野田町有志の歡迎宴が催さるゝので一行は一浴後夕闇が野田の町を覆ひ包む頃宴會場たる門松樓へ參集したのであつた開宴にあたり野田町長の丁寧なる御挨拶あり之に次で那波副會長が一行を代表して答辭をのべられて宴に移り宴は町有志の接待至らざるなく加ふるに阿嬌の斡旋によりいつ果つべくとも見えざる盛宴であつたが閉會したのは夜もはや十一時に近かつた。

各自思ひ思ひに旅宿へ歸つたので中には酔歩蹣跚の人達もあつたとの事であつた歸宿後は烏鷺を闘す元氣な方もあつたが次第に深き眠り就にいた後は田圃に鳴く蛙の聲のみ喧しかつた。

翌十六日は前日に勝る好天氣で一同朝餐後野田醤油株式会社釀造工場を拜見した當工場は斯界稀に見る新設備のもので釀造高年 50 萬石と稱され資本金 3,000 萬圓之に従事する者約 2,300 人とあつた其製品は内地は勿論遠く海外に迄も及んで居るので 1 箇年 50 萬石の釀造能力を動もすれば不足勝ちとの事で其盛況の程も察せらるゝのである又會社の採つて居る従業員に對する福利施設に至つても時代に適應したもので参考に資すべき事柄も多々あつたのである、おいとまに際し我一行各自に同社の製品なる醤油味淋各一瓶を御土産として寄贈された、工場見學に再び前日のランチ 3 隻に分乘して利根運河、葛飾橋工事、江戸川水道水源工事、江戸川橋工事及江戸川放水路並に新川分派箇所(東京、利根川水系間の連絡運河)を視察したのであつた、各視察箇所では前日同様各擔當者より懇切なる説明のあつた事は勿論である、午後五時一行は市川町に上陸直に京成電車の臨時電車で歸京したのであつた散會に際し視察各所の關係各員の健康を祝して萬歳を三唱したのである。

此視察旅行は時間の少い割合に従來の視察旅行に比し其視察事項が可成り豊富であつたに

も不拘豫定通り遂行し得て豫想外の好結果を得たのは一重に内務省並に各會社の周到なる準備と多大の御好意とに依る所多く且つ現場工事掛員諸氏を煩した事も仲々多かつたのである茲に關係各員の御盡力を深く謝すと共に諸氏の御健康を祈る次第である。

尙末記ながら一行中の會員山本潔君の即吟を御紹介する。

五月十五日利根、江戸兩川改修工事視察旅行吟

古城

途上栗橋郊外	草鞋濕す溢れ噴井や桐の花
利根川舟航	水越ゆる百本杭や青嵐
	長堤の上に筑波や夏霞
江戸川下り	赤土の崖なだらかや躑躅咲く
野田町門松樓にて	朝戸操る旭のまぶしさや若楓
行徳附近	物洗ふ脛の白さや夏の川
	青東風や網うつ舟の揺れ止まず
	櫓の音の寐む氣催す日永哉

參加會員氏名 (五十音順)

青木 楠男君	青山 士君	稻垣 甚君	今泉安之助君
遠藤 藤吉君	岡 胤信君	小川 織三君	小野 基樹君
岡村 信三郎君	加藤 勇君	金井 彦三郎君	寛 斌治君
金古 久次君	樺島 正義君	神原 信一郎君	金 森 誠之君
菅野 忠五郎君	木村 貫一郎君	北澤 惇夫君	久保田正繼君
草間 偉君	楠 宗造君	近藤 仙太郎君	下村 尙義君
鈴木 軍藏君	竹内 季一君	辰馬 鐵藏君	丹治 經三君
東福寺正雄君	富永 正義君	那波 光雄君	中川 吉造君
中桐春太郎君	中倉 專一郎君	長滋 重磨君	丹羽 鋤彦君
野田 六次君	濱野 彌四郎君	春木 節郎君	伴 宜君
福田 次吉君	細野 芳彦君	堀内 貞造君	堀口 勝己君
本間源兵衛君	曲尾 辰二郎君	松田 文次君	宮崎 正夫君
宮島 三郎君	宮長 平作君	村 幸長君	茂庭 忠次郎君
森 忠藏君	山本 新次郎君	山本 潔君	吉田 耕一君
和田 重辰君	岡部 藤次郎君	川俣 謙二郎君	田村 節次君

土木學會職員

岡村 又市君	小林 孝造君	鬼海 治三郎君	北村 嘉太郎君
山岸 倉藏君	海老澤 昇次郎君	松本 利一君	



(土木學會誌第十二卷第三號附圖)

關宿閘門に於ける土木學會視察團一行

### 新入會者にして既刊會誌希望者に告ぐ

本會々誌は新入會者には入會の月より以降發行に係るものより配付致すべくに付其の以前の會誌御希望の場合には一部に付下記金額振替口座一六八二八に拂込用紙通信欄に其旨記入請求せられたし

#### 殘 部 内 譯

第五卷一號二號	一 部 金 壹 圓
第六卷三號六號	同
第七卷一號二號三號四號	同 金 壹 圓 五 拾 錢
第八卷一號二號三號六號	同 金 貳 圓
第九卷一號二號三號五號六號	同 金 貳 圓
第十卷二號三號四號五號六號	同 金 貳 圓
第十一卷一號二號三號六號	同 金 貳 圓
第十一卷五號 (附綴付)	同 金 參 圓
第十二卷第一號	同 金 貳 圓
第十二卷二號 (附綴付)	同 金 貳 圓 五 十 錢
東京市内外交通に関する調査書	同 金 參 圓
土木學會誌索引	同 金 五 拾 錢

#### 本會會員轉居又は旅行の場合の注意

會員の宿所の不明なるときは會誌の配付を始め其他通信上に差支候に付御轉居の際は至急明細に御通知相成度又御旅行等にて御不在となるも會費支拂には差支なき様御配慮相成たし

#### 會 費 納 付 に 付 注 意

本會々費は下記の通りにして本會より發する振替集金に對し必ず御支拂の事若し此の集金書へ十五日間中三回の取立共支拂なき場合は最寄郵便局に就き本會振替口座東京一六八二八番に(拂込用紙通信欄に會費たる事を記入の事)御拂込相成御整理の都合有之候に付會費一時納付の御豫定又は其の他の都合に依り支拂なき場合は直に御通知相成たし

朝鮮滿洲の一部及び青島等振替貯金を取扱はざる地に居住せらるゝ會員は納期の翌月末頃迄集金を受けざるときは爲替其他の方法に依り直ちに御送金相成たし

會員種格	會費年額	自一月至四月 第一期分二月徴收	自五月至八月 第二期分六月徴收	自九月至十二月 第三期分十月徴收
會 員	金拾八圓	金六圓	金六圓	金六圓
准 員	金拾貳圓	金四圓	金四圓	金四圓
學 生 員	金七圓五拾錢	金貳圓五拾錢	金貳圓五拾錢	金貳圓五拾錢

新に入會したるものは月割計算とし入會の翌月集金を發す

#### 會 費 未 納 に 付 注 意

會費は從來年額を第一期第二期第三期に分割し毎年二月六月十月に振替貯金郵便として取立方を郵便局に依託の處往々集金郵便に對して故なく支拂を拒絶し尙他の方法に依りても送金なき者あれ共斯くては會費滞納者として遺憾ながら規則第十三條第一項に依り遂に會誌の配付を停止せらるゝに至るべく又本會に於ても未納金督促の手數一通ならず故に今後右様のことなき様特に御留意の上集金郵便に御拂込相成たし

#### 會 誌 未 着 の 場 合 の 注 意

會誌は毎年二月四月六月八月十月十二月(印刷又は原稿等の都合に依り翌月上旬配付の事あり)に發行し漏なく配付すべくに付翌月末着の場合には一應本會に御照會相成たし從來往々發行後數ヶ月經過して照會せらるゝ向あるも斯くとて殘部皆無となり遺憾ながら配付不可能のことあるべきに付御留意相成たし



領收報告 自大正十五年三月十六日 至大正十五年五月卅一日 間受付分 (受付順)

會員大正十三年度第一期分會費

金 六 圓 大塚晃長君

會員大正十三年度第二期分會費

金 六 圓 宛 原 清 明君 池 原 英 治君

會員大正十三年度第三期分會費

金 六 圓 宛 竿 田 秀 靜君 萩 野 廣君

會員大正十四年度第一期分會費

金 壹 圓 澤 井 八 洲 男君

會員大正十四年度第二期分會費

金 六 圓 原 清 明君

會員大正十四年度第三期分會費

金 六 圓 宛 原 清 明君 大塚晃長君 萩 野 廣君

神門久太郎君 田崎修君 松本岩太郎君

會員大正十四年度第三期分會費

金壹圓五拾錢 黑 岩 隆君

會員大正十四年度第三期分會費

金 六 圓 宛 原 清 明君 井 口 鹿 象君 山 中 良 樹君

佐橋信一君 塚本積君 三浦七郎君 松浦圓四郎君

尾崎武洋君 木村芳人君 土屋祥三君 安 倍 強君

田井九一君 山口繁君 池原英治君 平井晴二郎君

大田明治君 小松然三郎君 迎塚保三君 德永泰人君

荒木榮二君 坂本助太郎君 能見光男君 松本岩太郎君

岩澤忠恭君

會員大正十五年度第一期分會費

金 參 圓 高 田 清君

會員大正十五年度第一期分會費

金 六 圓 宛 安 永 五 三 二君 原 清 明君 柳 生 義 郎君

渡邊時敏君 中川政次郎君 沼田政矩君 朝倉政次郎君

山邊芳雄君 奧平清貞君 小野榮作君 坂田時和君

足立藤一君 百瀨泰次郎君 吉田德次郎君 吉田登君

高西敬義君 吉田鏡君 下浦眞清君 池田一郎君

三根奇能夫君 大井治男君 小池慎藏君 前田廣治君

根來簡二君 大藏公望君 平野淺吉君 三浦宇三郎君

松田虎喜代君 迎塚保三君 野方寅吉君 相良守君

杉村博通君 山中良樹君 寺本千太郎君 秋元重保君

西門善三郎君 黑 岩 隆君

會員大正十五年度第二期分會費

金 壹 圓 萩 原 基 治君

會員大正十五年第二期分會費

金 六 圓 張 惟 和君

會員會費一時納付(差額)

金 五 拾 圓 小 田 林君  
(前 號 報 告 洩 / 分)

會員會費一時納付(差額)

金 五 拾 圓 宛 長 屋 倫君 松 尾 寬 一君 沖 鹽 政 次君  
北 川 正 世君

會員會費一時納付

金 百 六 拾 圓 阿 部 謙 夫君

准員大正十一年度第一期分會費

金 參 圓 吉 岡 計 之 助君

准員大正十二年度第一期分會費

金 四 圓 佐 川 達 太 郎君

准員大正十二年度第二期分會費

金 貳 圓 荻 野 廣君

准員大正十二年度第二期分會費

金 四 圓 宛 山 中 清 一君 小 林 紫 朗君 山 崎 愼 二君

准員大正十二年度第三期分會費

金 壹 圓 趙 炳 國君

准員大正十二年度第三期分會費

金 四 圓 內 山 曾 一 郎君

准員大正十三年度第一期分會費

金 四 圓 宛 中 林 敏 男君 和 田 重 辰君 趙 炳 國君  
佐 川 達 太 郎君 安 藤 豐 祿君

准員大正十三年度第二期分會費

金 壹 圓 成 瀬 正 成君

准員大正十三年度第二期分會費

金 四 圓 內 山 曾 一 郎君

准員大正十三年度第三期分會費

金 四 圓 宛 吉 岡 計 之 助君 園 田 博 智君 高 木 春 雄君  
榎 本 正 樹君 成 瀬 正 成君 若 林 清君 馬 場 宗 光君  
山 崎 愼 二君 內 山 曾 一 郎君 伏 島 信 九 郎君 佐 川 達 太 郎君

准員大正十四年度第一期分會費

金 四 圓 宛 吉 岡 計 之 助君 小 早 川 貞 三君 櫻 井 辰 造君  
小 田 桐 一 雄君 篠 宮 彌 吉君 菅 井 留 治 郎君 安 部 邦 夫君  
榎 本 正 樹君 長 谷 川 四 郎君 陶 山 直 次 郎君 小 池 英 吉君  
佐 藤 東 次 郎君 見 山 剛君 矢 野 常 一君 小 林 信 一 郎君  
小 林 紫 朗君 立 川 大 市君 山 崎 愼 二君 坂 上 丈 三 郎君  
菊 池 芳君 白 川 周 一 君 長 峰 孫 治君 大 川 大 三君  
助 川 廣 義君 下 浦 眞 清君 佐 川 達 太 郎君 佐 土 原 勲君

准員大正十四年度第一期分會費

金壹圓宛 小林勳君 大森義文君

准員大正十四年度第二期分會費

金四圓宛	吉岡計之助君	山口圭助君	櫻井辰造君
木村小市君	小林勳君	伊藤孝治君	大森義文君
川谷藤男君	兒島重次項君	木代嘉七君	佐藤好君
西村正人君	坂木雅雄君	成瀬正成君	中原達弘君
萩原基治君	關野忠治君	岩崎瑩吉君	神谷榮一耶君
中村一俊君	松島義雄君	福島福藏君	吉原正明君
坂上丈三耶君	菊池芳君	白川周一君	荒木忠義君
土井正中君	岩瀬安藏君	中島種吉君	西義一君
大川大三君	木下基一耶君	渡邊清君	九鬼秀治君
佐川達太耶君	服部政一君	坂部素夫君	

准員大正十四年度第二期分會費

金壹圓宛	堀越一三君	毛利魁君	町田義知君
齋藤祐之介君	松本三三夫君	前川正君	吉田彌七君

准員大正十四年度第二期分會費

金貳圓宛	大西保夫君	山本幸夫君	藤枝菊治君
中川竹三耶君	小林勇君		

准員大正十四年度第二期分會費

金參圓宛	磯部光雄君	中尾光信君	張昌熙君
------	-------	-------	------

准員大正十四年度第三期分會費

金參圓宛	川上收治君	武本光太郎君	小林幸治君
今泉佳三耶君	仲谷光君	田邊平學君	濱田稔君
谷口忠君	佐川達太耶君		

准員大正十四年度第三期分會費

金貳圓宛	小川琢磨君	加納次耶君	齋藤四耶君
------	-------	-------	-------

准員大正十四年度第三期分會費

金壹圓	伴格夫君		
-----	------	--	--

准員大正十四年度第三期分會費

金四圓宛	吉岡計之助君	飯塚博君	堀越一三君
吉田二億君	後藤久吉君	野矢清君	渡邊祇一耶君
田代覺藏君	毛利魁君	坂本昇君	菊地清君
米田達次耶君	德重正雄君	志戸田直道君	高橋守一君
重富潔君	關定三耶君	溝江昇君	伊藤孝治君
北村嘉太耶君	木梨文君	石崎貞二耶君	武藤吉治君
町田義知君	寺田竹治君	淺見洋君	大島左門君
柏原清助君	草川清康君	日野弘之君	牧野潔君
松谷正君	中津光藏君	平野省三君	鈴木直彦君
木代嘉七君	齋藤祐之介君	中林敏男君	竹原正規君
佐藤義正君	松村章君	大須賀一策君	中野重三耶君

伊藤 藤林 百世 伊藤 藤林 百世 伊藤 藤林 百世  
 內山 林本 達一 內山 林本 達一 內山 林本 達一  
 藤枝 幸菊 夫君 藤枝 幸菊 夫君 藤枝 幸菊 夫君  
 劉仁 義 雙君 劉仁 義 雙君 劉仁 義 雙君  
 江崎 村 良君 江崎 村 良君 江崎 村 良君  
 大吉 誠 七君 大吉 誠 七君 大吉 誠 七君  
 吉野 岡 二君 吉野 岡 二君 吉野 岡 二君  
 森中 野 爭 珠君 森中 野 爭 珠君 森中 野 爭 珠君  
 神邊 俊 太君 神邊 俊 太君 神邊 俊 太君  
 長谷川 治 一君 長谷川 治 一君 長谷川 治 一君  
 服部 木 義 照君 服部 木 義 照君 服部 木 義 照君  
 高寺 田 正 彦君 高寺 田 正 彦君 高寺 田 正 彦君  
 濱安 高 橋 己 夫君 濱安 高 橋 己 夫君 濱安 高 橋 己 夫君  
 柳田 田 忠 治君 柳田 田 忠 治君 柳田 田 忠 治君  
 栗水 鈴 祥 六 耶君 栗水 鈴 祥 六 耶君 栗水 鈴 祥 六 耶君

雅雄 本端 坂河 雅雄 本端 坂河 雅雄 本端 坂河  
 八仁 像 宗 八仁 像 宗 八仁 像 宗  
 保豐 西尾 大 保豐 西尾 大 保豐 西尾 大  
 直豐 尾田 畑 直豐 尾田 畑 直豐 尾田 畑  
 紫次 林小 今 紫次 林小 今 紫次 林小 今  
 福島 村 福 福島 村 福 福島 村 福  
 崎平 崎平 崎平 崎平 崎平 崎平 崎平 崎平  
 右衛 右衛 右衛 右衛 右衛 右衛 右衛 右衛  
 滿三 滿三 滿三 滿三 滿三 滿三 滿三 滿三  
 清一 清一 清一 清一 清一 清一 清一 清一  
 忠義 忠義 忠義 忠義 忠義 忠義 忠義 忠義  
 政吉 政吉 政吉 政吉 政吉 政吉 政吉 政吉  
 末輔 末輔 末輔 末輔 末輔 末輔 末輔 末輔  
 正一 正一 正一 正一 正一 正一 正一 正一  
 基光 基光 基光 基光 基光 基光 基光 基光  
 素夫 素夫 素夫 素夫 素夫 素夫 素夫 素夫

八馬 田合 八馬 田合 八馬 田合  
 二一 一常 二一 一常 二一 一常  
 耶一 耶一 耶一 耶一 耶一 耶一 耶一 耶一  
 俊三 俊三 俊三 俊三 俊三 俊三 俊三 俊三  
 正義 正義 正義 正義 正義 正義 正義 正義  
 光良 光良 光良 光良 光良 光良 光良 光良  
 雄文 雄文 雄文 雄文 雄文 雄文 雄文 雄文  
 松德 松德 松德 松德 松德 松德 松德 松德  
 三源 三源 三源 三源 三源 三源 三源 三源  
 耶一 耶一 耶一 耶一 耶一 耶一 耶一 耶一  
 勇芳 勇芳 勇芳 勇芳 勇芳 勇芳 勇芳 勇芳  
 吉貞 吉貞 吉貞 吉貞 吉貞 吉貞 吉貞 吉貞  
 次修 次修 次修 次修 次修 次修 次修 次修  
 雄九 雄九 雄九 雄九 雄九 雄九 雄九 雄九  
 耶豐 耶豐 耶豐 耶豐 耶豐 耶豐 耶豐 耶豐  
 次鐵 次鐵 次鐵 次鐵 次鐵 次鐵 次鐵 次鐵  
 耶三 耶三 耶三 耶三 耶三 耶三 耶三 耶三

松本 三三 夫君 松本 三三 夫君 松本 三三 夫君  
 栗西 常二 常二 栗西 常二 常二 栗西 常二 常二  
 關野 忠治 忠治 關野 忠治 忠治 關野 忠治 忠治  
 小川 兼次 兼次 小川 兼次 兼次 小川 兼次 兼次  
 小梅 良雄 良雄 小梅 良雄 良雄 小梅 良雄 良雄  
 脊掛 重次 重次 脊掛 重次 重次 脊掛 重次 重次  
 森坂 深八 深八 森坂 深八 深八 森坂 深八 深八  
 西田 務一 務一 西田 務一 務一 西田 務一 務一  
 松尾 春雄 春雄 松尾 春雄 春雄 松尾 春雄 春雄  
 高野 真八 真八 高野 真八 真八 高野 真八 真八  
 長村 組一 組一 長村 組一 組一 長村 組一 組一  
 真津 組一 組一 真津 組一 組一 真津 組一 組一  
 林金 子久 子久 林金 子久 子久 林金 子久 子久  
 大長 峰邊 峰邊 大長 峰邊 峰邊 大長 峰邊 峰邊  
 渡川 大秀 大秀 渡川 大秀 大秀 渡川 大秀 大秀  
 大九 鬼木 鬼木 大九 鬼木 鬼木 大九 鬼木 鬼木  
 正小 林節 林節 正小 林節 林節 正小 林節 林節

准員大正十五年第一期分會費 金 貳 圓 大 西 保 夫君

准員大正十五年第一期分會費 金 四 圓 免

北村 三國 耶君 北村 三國 耶君 北村 三國 耶君  
 篠原 邊 實君 篠原 邊 實君 篠原 邊 實君  
 西岡 真文 喜君 西岡 真文 喜君 西岡 真文 喜君  
 星野 本修 雄君 星野 本修 雄君 星野 本修 雄君  
 渡本 邊 幸 潔君 渡本 邊 幸 潔君 渡本 邊 幸 潔君  
 今井 重 雄君 今井 重 雄君 今井 重 雄君  
 木村 山千 里君 木村 山千 里君 木村 山千 里君  
 松井 精二 耶君 松井 精二 耶君 松井 精二 耶君  
 野村 清常 治君 野村 清常 治君 野村 清常 治君  
 相山 常 治君 相山 常 治君 相山 常 治君  
 阿部 真 藩君 阿部 真 藩君 阿部 真 藩君

北川 幸三 耶君 北川 幸三 耶君 北川 幸三 耶君  
 々木 齊治 耶君 々木 齊治 耶君 々木 齊治 耶君  
 田田 貞弘 年君 田田 貞弘 年君 田田 貞弘 年君  
 永深 川太 耶君 永深 川太 耶君 永深 川太 耶君  
 村瀨 吉豐 吉君 村瀨 吉豐 吉君 村瀨 吉豐 吉君  
 田武 藤治 吉君 田武 藤治 吉君 田武 藤治 吉君  
 大原 內之 輔君 大原 內之 輔君 大原 內之 輔君  
 增田 清三 耶君 增田 清三 耶君 增田 清三 耶君  
 直山 利 實君 直山 利 實君 直山 利 實君  
 田邊 利 實君 田邊 利 實君 田邊 利 實君  
 遊 隆 青君 遊 隆 青君 遊 隆 青君

河合 治八 耶君 河合 治八 耶君 河合 治八 耶君  
 小林 幸治 耶君 小林 幸治 耶君 小林 幸治 耶君  
 杉村 俊策 吉君 杉村 俊策 吉君 杉村 俊策 吉君  
 中留 正廣 市君 中留 正廣 市君 中留 正廣 市君  
 三城 佐廣 三君 三城 佐廣 三君 三城 佐廣 三君  
 谷原 基一 耶君 谷原 基一 耶君 谷原 基一 耶君  
 茨田 誠久 君 茨田 誠久 君 茨田 誠久 君  
 大深 城菊 治君 大深 城菊 治君 大深 城菊 治君  
 藤枝 清次 耶君 藤枝 清次 耶君 藤枝 清次 耶君  
 三居 軍重 辰君 三居 軍重 辰君 三居 軍重 辰君  
 武居 軍重 辰君 武居 軍重 辰君 武居 軍重 辰君  
 和田 重 辰君 和田 重 辰君 和田 重 辰君

小幡 尙德 耶君 小幡 尙德 耶君 小幡 尙德 耶君  
 住喜 太修 廣君 住喜 太修 廣君 住喜 太修 廣君  
 中村 典一 君 中村 典一 君 中村 典一 君  
 光成 毅平 君 光成 毅平 君 光成 毅平 君  
 八等 確一 君 八等 確一 君 八等 確一 君  
 植村 藏君 植村 藏君 植村 藏君  
 上原 二君 上原 二君 上原 二君  
 小早 川三 君 小早 川三 君 小早 川三 君  
 平井 義一 君 平井 義一 君 平井 義一 君  
 松尾 英敏 照君 松尾 英敏 照君 松尾 英敏 照君  
 高本 義照 照君 高本 義照 照君 高本 義照 照君  
 清川 忠 照君 清川 忠 照君 清川 忠 照君

新井文藏君	麻生幹雄君	入江矩夫君	池田一男君
今村林準一君	飯塚末喜君	小野野山常作君	岡崎井正三君
小田村初代志君	田中應次郎君	瀬戸川三男次君	山田惠太郎君
吉田仙之丞君	守原壽一郎君	小林庄治君	森山幸太繁君
春藤眞勝君	飯田作三郎君	金岡桂次郎君	遠藤茂利三君
姉川俊一君	平野省太郎君	後藤久吉君	伊藤藤石藏君
竹川憲助君	鴨下勝太郎君	小谷榮治君	佐藤橋經德君
荒木原民次君	住田明七郎君	高木堅政市君	高吉丸一太郎君
白川竹三郎君	諸岡秀太郎君	八ヶ代彦一司君	磯野長太助君
中多篤戒二君	善如居亮三君	河喜多川新治郎君	辰森山勝次男君
箕浦竹治君	奧保原久義君	堀村正忠作君	森北條德三郎君
鏡山八郎君	宮村茂良君	中阿部邊良三君	青鬼海治三郎君
神谷榮一平君	大澤忠三郎君	渡白鳥啓吾君	磯日笠川正一君
山本兵之助君	劉野順太郎君	北片原榮治郎君	伊藤幸和君
橫田龍左衛門君	藤田恒昌三君	石伏島信九郎君	張山田樹四郎君
飯田伊作君	張川大嶮太郎君	柴島明亮吉君	齋藤川與市君
近有本恒格夫君	大山本源正名君		
伴邊彦謙三君	平樋安藤豐祿君		
大森賢君			

准員大正十五年度第二期分會費

金五拾錢 伊藤茂利三君

准員大正十五年度第二期分會費

金四圓宛	北條次男君	關源三君	岸川俊輔君
大川大三君	伴格夫君	杉浦義高君	山崎慎二君
平本源太郎君	桑原廉次君	齊藤四郎君	高凌美君
南出保太郎君	鈴木祥六郎君	安藤豐祿君	

准員大正十五年度第三期分會費

金參圓 伴格夫君

准員大正十五年度第三期分會費

金四圓宛	關源三君	大川大三君	山崎慎二君
桑原廉次君	南出保太郎君	安藤豐祿君	

准員會費一時納付

金百拾圓 澤井八州男君

學生員大正十一年度第三期分會費

金壹圓 高野興作君

學生員大正十二年度第一期分會費

金貳圓五拾錢 高野興作君

學生員大正十二年度第二期分會費

金貳圓五拾錢 趙炳國君

學生員大正十二年度第三期分會費

金壹圓八拾七錢 趙炳國君

學生員大正十二年度第三期分會費

金貳圓五拾錢 高野興作君

學生員大正十三年度第二期分會費

金壹圓八拾七錢 成瀬正成君

學生員大正十三年度第三期分會費

金貳圓五拾錢 加納次郎君

學生員大正十三年度第三期分會費

金貳圓五拾錢宛 阪本雅雄君

高野興作君 小林勇君

池田三七君 加納次郎君

中間友義君 張昌熙君

學生員大正十四年度第一期分會費

金貳圓五拾錢宛 若原政夫君

高凌美君 坂本雅雄君

池田三七君 中間友義君

學生員大正十四年度第二期分會費

金貳圓五拾錢宛 若原政夫君

池田三七君

學生員大正十四年度第二期分會費

金壹圓八拾七錢 堀越一三君

學生員大正十四年度第二期分會費

金壹圓貳拾五錢宛 山本幸夫君

小林勇君 小川正信君

學生員大正十四年度第三期分會費

金貳圓五拾錢宛 若原政夫君

佐々木與志君 小川正信君

池田三七君 中間友義君

學生員大正十四年度第三期分會費

金壹圓貳拾五錢 井尻忠義君

學生員大正十四年度第三期分會費

金六拾貳錢 早田英夫君

學生員大正十五年度第一期分會費

金貳圓五拾錢宛 原田謙二君

君島與一君 池田三七君

早田英夫君 井上元雄君

宮崎貢君 高木健吉君

室川與一君 蓮尾誌藏君

白井一耶君 藤井虎男君

樋田廣正君 小川正信君

前園千代次君 中間友義君

若槻章一君 佐々木與志君

平井彌之助君

學生員大正十五年度第一期分會費

金壹圓九拾錢 井尻忠義君

學生員大正十五年第一期分會費

金壹圓八拾七錢 雨 森 常 夫君

學生員大正十五年第二期分會費

金貳圓五拾錢宛 藤 井 虎 男君 平 井 彌 之 助君

學生員大正十五年第二期分會費

金 五 拾 錢 室 川 與 一君

## 寄稿に関する注意事項

- (1) 御寄稿は成るべく本會の原稿用紙を用ひ横書きとすること。原稿用紙は御請求次第送附す。
- (2) 御寄稿は止むを得ざる場合の外は成るべく會誌 50 頁程度（本會原稿用紙 150 枚）と致され度若しも前記頁數を超過する場合は適宜其程度に縮小を御願することあるべし。
- (3) 御寄稿は成るべく邦文にて假名は平假名を用ひ句讀點を入れられたきこと。
- (4) 地名人名等凡ての外國固有名詞は原語の儘とし尙術語中譯語の紛らはしきもの及數箇の譯語あるものは成るべく原語を記入すること。

- (5) 歐字は特に明瞭に認むること。

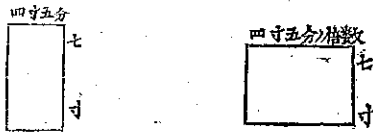
n と u 又は k, U と v, C と c, K と k, M と m, N と n, U と u, S と s, V と v, r と v, a と α, r と γ, u と μ

等の區別には特に御注意せられたきこと。


- (6) 新に圖面御作製の場合には次の各項に御注意ありたきこと。

- (イ) 添附圖面中の標題及説明用文字等横書きの場合には左より始め右に終ること。
- (ロ) 圖面は成るべく其儘縮寫し得る様トレーシング・ペーパー、オイル・ペーパー、トレーシング・クロス等に寸法及寸法線等凡て墨線にて明瞭に認むること。
- (ハ) 方眼紙に畫きたる圖面にして縦横線を必要とする部分には豫め墨線にて之を畫き置くこと。
- (ニ) インキを使用せる圖面又は青色寫眞の類は其儘縮寫不可能に就き避けられたきこと。
- (ホ) 圖面は次に示す如く縦は七寸、横は四寸五分、又は縦は七寸横は四寸五分の倍數に縮寫すべきに就き其御心組にて御調製されたきこと。

縮寫後の寸法は次圖の如くなるものとす



尙圖中の寸法其他説明用文字等は上記寸法に縮寫したる後に於ても明瞭なる様充分なる大きさのものとすること。

- (ヘ) 圖面には出來得る限り梯尺  を地圖其他必要のものには方位を記入されたきこと。
- (ト) 圖面は着色にて區別することは成るべく避け墨線にて他の符號を以て區別すること、但し已むを得ざる場合には着色數を少くされたきこと。



- (7) 講演論説報告に要する原稿及圖面調製上特に費用を要する場合には御申出あれば本會に於て之を支辨することあるべし。
- (8) 講演、論説報告の各欄に掲載の分には抜刷50部を寄稿者に贈呈するものとす。
- (9) 抜刷は寄稿者の希望に依り實費にて御要求に應ずることあるべし。
- (10) 講演、論説報告には内容梗概を本文冒頭に添付されべきこと、尙内容梗概の英譯を併記せられたし。
- (11) 原稿返却御希望の節は其旨申出られたきこと。
- (12) 參考資料御寄稿の際には雜誌名、年號、月日を(Engineering News-Record, March 9, 1922 の如く)明記すること。
- (13) 講演、論説報告に關する討議は該講演又は論説報告の掲載したる會誌より第五冊目の會誌を以て最終締切となすに就き討議御寄稿の節には御注意願ひたきこと。
- (14) 本會誌原稿締切期日は凡て奇數の月(1, 3, 5, 7, 9, 11 月)の 15 日とす。

### 算式其他の記し方大體標準

- (1) 本文、文字間に算式を挿入する場合には次の如く記すこと。  
 $a/d$  と書き  $\left\{ \frac{a}{b} \right\}$  を避けること。 $(a+b)/(c+d)$  と書き  $\left\{ \frac{a+b}{c+d} \right\}$  を避けること。
- (2) 獨立したる列に算式を記す場合は次の如く記すこと。  
 $\frac{1}{3}x$  と書き  $\left\{ \frac{x}{3} \right\}$  を避けること。 $\frac{1}{2}(a+b)$  と書き  $\left\{ \frac{a+b}{2} \right\}$  を避けること。  
 $\frac{a}{b+c/d}$  と書き  $\left\{ \frac{a}{b+\frac{c}{d}} \right\}$  を避けること。 $\sqrt{x}$  又は  $x^{\frac{1}{2}}$  と書き  $\left\{ \sqrt{x} \right\}$  を避けること。  
 $i$  又は  $\sqrt{-1}$  と書き  $\left\{ \sqrt{-1} \right\}$  を避けること。 $1/x$  又は  $x^{-1}$  と書き  $\left\{ \frac{1}{x} \right\}$  を避けること。  
 $x^{-n}$  と書き  $\left\{ \frac{1}{x^n} \right\}$  を避けること。
- (3) 千以上の數字は 53,247,000 の如く記すこと。
- (4) 名數は次の如く記し( )を付たる様を書くことを避けること。  
 83.4尺(八丈三尺四寸)。7吋(七吋)。35錢(三十五錢) 13.56圓(十三圓五十六錢)。12時間(十二時間)。1~4時間(一乃至四時間)。88,326噸(八萬八千三百二十六噸)。1920年12月31日(千九百二十年十二月三十一日)。54%(54パーセント)。



故工學士 太田圓三君

## 故工學士 太田圓三君略歴

大正十二年九月一日、幾萬の生靈と巨億の富とを烏有に歸したる彼の大震火災の直後に當り、計畫せられたる帝都復興の事業は、其規模の宏大なる、蓋し本邦土木史上に特筆す可き一大企圖なりと謂ふ可し。而して此事業の中心となりて、幾多の難局に處し、日夜精勵努力、以て其計畫を確立し、遂に實行の域に達せしめたるものは、實に故復興局土木部長太田圓三君なりとす。

君は伊豆國伊東町の舊家太田惣五郎氏の二男として、明治十四年三月十日を以て同町湯川に呱呱の聲をあぐ。長ずるに及び縣立静岡中學校及東京府立尋常中學校を経て、第一高等學校に入り、進んで明治三十七年東京帝國大學土木工學科を卒業し、直に職を逓信省鐵道作業局に奉ず。明治四十三年鐵道院より歐米に留學を命ぜられ、研鑽を積むこと二年にして、大正元年歸朝し、爾來専ら鐵道建設の業務に鞅掌し、大正九年建設局工事課長に補せられ、同十二年勅任官に進む。大正十二年十月擢はれて、帝都復興院理事に任せられ更に土木局長に補せられる。大正十三年官制改正と共に復興局土木部長となり復興事業に盡瘁すること茲に二年有半にして、同十五年三月二十一日病を得瀕焉として長逝す。

君は鐵道に在ること、前後二十餘年、その間終始新線の建設に關與し、傍鐵道の建設運轉信號等の規程改正、工事契約書示方書の改善、鐵道線路構造物の基準設計等に與りて、功績見る可きものあり。就中高低線利用に依る線路選定法の採用、機械力利用に依る施工の改革等の如きは、君の識見手腕に待ちたる所頗る大なるものなりき。

君又轉じて帝都復興の重任に當るや、渾身の熱誠を以て事業に盡瘁し、寢食を忘れて區劃整理の大計、道路橋梁運河等の計畫樹立に努力し、又其遂行に當つては、ニューマチック・ケーソン及スチール・シート・パイルの利用、一千噸試驗機の設置、其他隅田川六大橋梁を初め一般道路橋梁の設計型式意匠等に幾多見る可き實績を顯し、實に本邦技術界に一新期を劃すべき貢獻を爲せり。

君人となり、高潔にして心裡恬淡、情誼に厚く、天稟の才に富むと共に其強烈なる實行力は、克く萬難を排して所信を貫くの概ありき。又克く後進の誘掖啓發に努め、其指導の恩義に感せるもの頗る多し。

君か獻身の力を注きたる復興の大業は、今や其緒につき、成果の漸く見るべきものあらんとするに際し、過度の心勞は遂に君をして又起つ能はざるに至らしめたり。事業半にして君其犠牲に倒ると雖も、その遺せし幾多の偉績は、蓋し吾技術史上に炳として輝くものあらん。

君に三男ありしも夭折して今や幼嗣陽三氏を残せるのみ。將來遠く保育の任に當らるる未亡人とも子夫人の心事や洵に同情の念に堪えざるなり。